法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-21

学界の動向 第3回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム

鈴村, 裕輔 / SUZUMURA, Yusuke

(出版者 / Publisher)
法政大学大学院国際日本学インスティテュート専攻委員会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
国際日本学論叢
(巻 / Volume)
11
(開始ページ / Start Page)
61
(終了ページ / End Page)
66
(発行年 / Year)
2014-03

Hosei University Repository

平成25年度　国際日本学論叢第11号　2014年３月18日発行　抜刷

学界の動向

第３回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム

法政大学国際日本学研究所
鈴　村　裕　輔

Hosei University Repository

学界の動向

第３回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム

法政大学国際日本学研究所
鈴　村　裕　輔

１．はじめに

2013年８月19日（月）から８月22日（木）にかけて、中国吉林省延辺朝鮮族自治州延吉市において、第３回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム（以下、本シンポジウム）が行われた。

今回、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成22年～平成26年）「国際日本学の方法に基づく＜日本意識＞の再検討―＜日本意識＞の過去・現在・未来」アプローチ（1）「＜日本意識＞の変遷―古代から近世へ」の一環として本シンポジウムに参加したので、詳細の報告を行う。

２．本シンポジウムの概要

2.1　主催、共催、後援団体

本シンポジウムは、延辺大学外国語学院及び延辺大学日本学研究所の主催により行われた。共催団体は延辺大学跨文化与東亜合作共同創新中心

Hosei University Repository

（延辺大学間文化・東アジア協力共同イノベーションセンター）、吉林省比較文学学会、成蹊大学アジア太平洋研究センター、中国日語教学研究会、朝鮮族研究学会、新潟県立大学、弘前大学人文学部及び教育学部、福岡国際大学、明治大学大学院教養デザイン研究科であり、後援団体は国際交流基金、北京日本文化センター、外語教学与研究出版社、華東理工大学出版社、延辺大学出版社であった。

2.2　本シンポジウムの日程

本シンポジウムは４日間の日程で行われた。すなわち、第１日目となる８月19日（月）には参加登録と参加者による夕食会が行われ、参加者同士の情報交換と交流がなされた。第２日目の８月20日（火）は８時から18時まで開会式、基調講演と分科会での研究発表が行われ、18時から20時まで晩餐会が開かれた。第３日目の８月21日（水）は８時から12時20分まで分科会での研究発表、招待講演、閉会式が行われ、13時から14時15分まで午餐会が行われた。第４日目は８月22日（木）に希望者による実地踏査が行われた。

2.3　本シンポジウムの概要

事前の登録では、基調講演５件、招待講演３件、研究発表183件が行われる計画であった。しかし、2013年７月から８月にかけて中国北部と南部で起きた洪水などの自然災害の影響もあり、中国国内から参加する予定の発表者のうち約40名が欠席した。

3．本シンポジウムの基調講演、招待講演及び研究発表の特徴

基調講演及び招待講演の講演者、所属及び論題を表１に示した。

Hosei University Repository

表１　基調講演及び招待講演の報告者、所属及び論題

種　別	発表者（敬称略）	所　　属	論　　題
基調講演	権　　宇	延辺大学	東アジア異文化研究の学術的な課題
基調講演	徐　　一平	北京外国語大学日本学センター	日本学の方法論をめぐって―コーパス構築の始点から
基調講演	野間　秀樹	国際教養大学	対照言語学的視座と言語教育―日韓対照言語学の最前衛と日本における韓国語教育から―
基調講演	修　　剛	天津外国語大学	異文化コミュニケーションと日本語教育
基調講演	波多野節子	新潟県立大学	李光洙の大陸放浪と中国第二革命―『無情』が東京で書かれたわけ―
招待講演	川口　義一	早稲田大学	初級日本語教育における「文脈化」「個人化」指導の実際―接続助詞ト・バ・タラ・ナラの指導を例として―
招待講演	李　　漢燮	高麗大学校	近代東アジアにおける新語・新概念の創出と交流―兪吉濬の『西遊見聞』を中心に
招待講演	白石　さや	東京大学	マンガ、アニメと東アジア

研究発表の概要を表２に示した。

表２　第３回中日韓中言語文化比較研究国際シンポジウムの研究発表の概要

分　　野	会場数（箇所）	発表数（件）
言　　語	8	71
日本語教育	3	31
社　　会	3	25
文　　化	3	25
文　　学	3	23
教育一般	1	8
合　　計	21	183

Hosei University Repository

表１、表２より、本シンポジウムでは言語及び日本語教育に関する研究成果の発表が主たる割合を占めていることが分かる。これは本シンポジウムが名称として「言語文化」を関していることからも当然の結果であると思われた。また、基調講演において修剛氏が指摘したように[(1)]、2012年の時点で中国における日本語学習者は約105万人と世界最多であり、特に高等教育機関での学習者が60万人を超え、日本語教育を担当する中国人の教員が約1600人、日本人の教員が約2300人、日本語学科を設置する大学数が506校と、質的にも量的にも中国の大学教育において日本語教育が一定の規模に達していることも、とりわけ中国国内から参加した報告者の発表の内容を特徴付けていることが推測された。

４．本シンポジウムの意義と成果

本シンポジウムは2009年の第１回、2011年の第２回に続いて開催された。発表件数、参加者数とも第２回を下回ったのは[(2)]、2012年８月以来続く日中両国の政治上の対立が影響したものと考えられた。しかし、しばしば学問が政治に影響される中国の国内事情を勘案すれば政治上の対立にもかかわらず学問上の交流を目的とする本シンポジウムが当初の計画の通りに開催されたこと自体に少なからぬ意義が存すると言えるだろう。また、自然災害の影響などにより欠席者が予定発表件数の２割を超えたものの、人口40万人強と決して大都市とはいえない延吉市において150件近い研究報告からなる学術的な催しが開かれることは、中国における日本研究、日本学の普及と発展を考える上で一定の効果を有するものと考えられる。

一方、各種の公演や研究発表についてみれば、時事的な話題や時流にそぐう課題だけでなく基礎的な問題や実践的な取り組みに基づく報告なども多数発表されたことは、一面において中国における日本研究の発展の段階

Hosei University Repository

を示唆するとともに、他面において中国における日本研究が、学問上の成果が国家と国民の利益に直接的に寄与することが求められる米国のようなあり方とは異なる環境に置かれていることを推察させるものであった。

さらに、招待講演における、「クールジャパンというとき、日本の政府や官公庁は、global化によって国民や国家を超えて流通する存在になったマンガやアニメを国家や国民の間での流通を前提とするinternationalizationの側面で捉えようとする」、あるいは「ソフト・パワー論は政治的な概念から出発したため、文化を手段として理解するが、本来は政治や経済が豊かな社会を築くための手段であって、文化は決して手段ではない」という白石さや氏の指摘[(3)]は文化的な事象を考える上で重要な視座を与えるものであるといえた。また、言語に関する発表が多かったものの、基調講演において野間秀樹氏が示した「言語から知へ進み、普遍的な価値へと発展、連携することの重要性」という観点[(4)]も、言語が単なる道具ではなく、知と文化の基盤であることを改めてわれわれに認識させるという意味において、重要な意義を持つものであった。

こうした知見は、主として文化的な事象に基づいて考察を進める手法による日本意識の研究にとっても示唆に富むものであると考えられた。

5．おわりに

本シンポジウムが所期の日程を無事に終えることができるとともに、上記のような成果を挙げることができた。2012年８月以来、日本と中国との間には政治的な対立が続き、緊張は緩和されていない。そのような中で本シンポジウムが行われたことは、学術上の交流を促進させるために重要な意義を持つものと推察された。

Hosei University Repository

注

（１） 修剛、「異文化コミュニケーションと日本語教育」、第３回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム基調講演、延辺大学、2013年８月20日。

（２） 第２回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム予稿集、2013年。

（３） 白石さや、「マンガ、アニメと東アジア」、第３回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム招待講演、延辺大学、2013年８月21日。

（４） 野間秀樹、「対照言語学的視座と言語教育―日韓対照言語学の最前衛と日本における韓国語教育から―」、第３回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム基調講演、延辺大学、2013年８月20日。